

## 退任にあたり

Sub Specie Aeternitatis ―永遠の相の下に

安村 典子

金沢で過ごした 13 年間は、誠に充実した日々であった。研究においては、微々たる成果しか挙げられなかったとはいえ、毎日夜半まで研究室に籠って自由に勉強をさせて頂き、教育においては、ギリシア語やラテン語に取り組む熱心な学生さん達に恵まれ、そしてまた、大学内外の良き友人たちにも恵まれて、本当に楽しく、実り多い日々を過ごす事ができた。金沢大学に招いて頂き、この山と川のある緑ゆたかな古都に住む事ができた事を、深く感謝している。とりわけ美しい雪の景色は、本当に心が慰められるものであった。その清冽な美しさは、雪かきや交通の不便さを補ってはるかに余りある、心魅かれる光景であった。間断なく激しく降る雪も、静かに降る雪も、強風にあおられて真横に降る雪も、いずれも美しく、金沢の良き思い出のひとつとして、深く心に残るものである。

もう一つ、この地に住むことによって経験することのできた楽しみについて記しておきたい。それは石川県に息づく伝統芸能や祭りにふれる機会を得たことであった。300 年以上の歴史をもつ能登の祭り、たとえば七尾市の青柏祭、能登町の宇出津あばれ祭、輪島市の名舟大祭、七尾市の御熊甲祭を、在任中に見物した。また、白峰の木偶回し、小松市のお旅祭り（子供歌舞伎）も鑑賞することができた。これらは地元の人々が大切に守り育ててきた、貴重な文化である。これらを担っている地元の人々は、誇り高く、素朴に祭りや芸能に打ち込んでいるように見受けられた。都会の商業主義とは無縁のその姿勢に、大きな感銘を受けた。これらの質の高い、そして際立った特徴をもつ数々の文化が、これから大切に保存されてゆくことを切に願っている。

金沢大学に着任したのは、1997 年 4 月で、イギリスからの着任であった。その 3 年前の 1994 年から、西洋古典学の本場イギリスで学ぶために、娘と 2 人でケンブリッジ大学に留学していたからである。教養部改組による分属により、当時は西洋古典語が工学部に配置されていたため、工学部情報システム工学科の所属であった。当初は日本の状況も十

分理解していなかったこともあり、工学部の所属であることを非常に奇異に思ったが、工学部所属によって得た事も多かった。ひとつは、そうでなければ決して知り合う事ができなかったであろう工学部教員の方々と親しくなることができ、理系の研究者の考え方にふれる事ができたことである。理系の人々は、実験の数値が予測と異なっていれば、自らの考えを捨てて、表れた数値を認める。事実をつきつけられた時に、あるいはより説得的な理論を提示された時に、自分の考えに固執することなく、それを潔く捨てる。この態度は、大いに学ぶべきものであると思った。

2006 年 4 月に、文学部人間学科人間学基礎論（組織改革後の現在は人文学類哲学・人間学）に移籍となった。これは工学部、文学部双方の緒先生方の並々ならぬご尽力によるものであった。この場を借りて改めて御礼申し上げる。文学部の先生方は新任教官として私を親しく迎えて下さり、様々な用務においても、気持ちよく仕事を教えて下さった。貢献といえるものは何一つできなかったが、共に働かせて頂いたことを深く感謝したい。

文学部に移籍された後はもちろんの事、工学部に在籍していたときも、一貫して西洋古典学の分野のみ、すなわちギリシア語・ラテン語の言語教育、西洋古典文学の講義・演習など、を担当させて頂いた事は、大変有り難いことであった。その中から西洋古典学に関心をもつ学生が少なからず現れ、更に大学院に進学した学生もあったことは、本当に嬉しいことである。勤勉に予習し、熱心にギリシア語やラテン語の演習に取り組む学生たちの姿は、私の喜びであり、励みであった。

古代ギリシア・ローマ時代に生み出された文学、哲学、歴史、政治、科学などの諸学問は、あらゆる人文学の基礎として、時空を越えて今なお燦然と輝き、普遍的な価値をもっていると思う。このような学問にふれることのできる機会を学生たちに与え続けたいと、切に思う。西洋古典学に関心をもつ若い人々の向学の芽が、今後どうか摘み取られる事なく、育てられてゆくことを願うのみである。

退職直前の 2009 年 12 月 19 日に、金沢大学創基 150 年を記念して、「ことばの力、文化の力、その起源」と題する人文学類主催のシンポジウムが、石川県文教会館で開催された。このときの 4 名の発表者の中のひとりに加えて頂き、教員、学生、金沢市民を対象として、「理性の輝き」と題する話をさせて頂いた。金沢での仕事を締めくくる、誠に良い機会を与えて頂いたと思う。このシンポジウムの企画・運営に携わって下さった先生方に、謝辞を申し上げたい。

私が初めてギリシア語とラテン語を学んだ母校、国際基督教大学の恩師である神田盾夫先生は、折に触れてスピノザの *sub specie aeternitatis*（永遠の相の下に）という言葉を口にしておられた。神を愛する者は理性的な徳をもつ、とスピノザは言う（『エチカ』第5部定理20）。「神」は「自然」であり、理性的に純化されて自然の理を認識しようとするれば、自然の核心に近づく認識を得るといふ。自分が自然の一部として存在していることの必然性を認め、その自然を知る喜びと愛、それがスピノザの言う永遠の相の下で世界の物事を見る次元である、とお習いした。悲しいとき、苦しいときに、ふと *sub specie aeternitatis* という言葉が思い出され、自らを励ましてきた。事物を永遠の相の下に認識する人は「自己・神および事物をある必然性によって意識し、…常に魂の真の平安を得ている」（『エチカ』最後の備考）という。そのような者でありたいと願う。そして、退職後も変わらず、西洋古典学の研究の道を歩み続けたい。生涯、<sup>いち</sup>一学徒として学び続ける者でありたい、その願いを今一度、心に深く思う。

最後に、哲学・人間学研究室の同僚である砂原陽一先生、柴田正良先生、三浦要先生に、深い感謝の気持ちをお伝えしたい。文学部への移籍の折には、専門分野が多少異なるにも拘らず、快く仲間に加えて下さり、以後、親しくさせて頂き、大変お世話になった。僅か4年の在籍にもかかわらず、本誌『哲学・人間学論叢』創刊号を私の退任記念号として出版するよう計画して下さいたことは、誠に感謝に堪えない。計画、編集にあたっては、とりわけ三浦先生のお手を煩わせた。心より御礼申し上げます。